

## (6) 読書

大学時代に入ると、丸山の読書にも当局の取り締まりの影がみられるようになる。1年次にはモーパッサン『女の一生』の翻訳本と原文を読み比べ、検閲によって削除された箇所を探すなど、当局の言論弾圧を潜り抜けるようなことをしている。2年次にはリッケルト『認識の対象』を読み、新カント学派の「価値」概念にも一定の理解を示している。だが、政治的なものを「ザロモンの」にイメージする丸山にとって、政治はあくまで科学的に捉えるべき対象であった。

先述した読書会では宮地健次郎や平沢道雄らの4人でローザ・ルクセンブルクの『資本蓄積論』『蓄積再論』、ヒルファードイングの『金融資本論』などを、『資本論』を参考にして読みこんだ。読書会を続けていくなかで、ヒルファードイングへの批判を十分に行わないソビエト連邦のアカデミズムに不信をもつに至ったという。

丸山はさらに、新カント派的な価値相対主義の立場に立つ法哲学者ラートブルフや、知識社会学者マンハイムの『イデオロギーとユートピア』などを原書で読み、見識を広げていった（画像：Karl Mannheim, *Ideology and Utopia: an Introduction to the Sociology of Knowledge* 〈丸山文庫登録番号 0182479〉）。父のすすめで陸羯南をはじめて読んだほか、マックス・ウェーバーやカール・シュミットの政治論などにも手を伸ばした。こうした丸山の専攻にとらわれない学習の成果は、のちに助手論文の執筆に結実することになる。



文学の領域で大学時代の丸山の心を強く掴んだのがロマン・ロランであった。旧制高校的教養主義から手にとった『ベートーヴェンの生涯』に感銘を受け、フランス語の習得を志し、助手時代には念願のフランス語原文で読んでいる。3年の夏休みには松本武四郎の勧めで避暑地に『ジャン・クリストフ』を持参して読書に明け暮れた。ロランのことばは丸山に強い印象を残し、教壇に立った後もたびたび引用句を学生に披露している。たとえば渋谷教育学園理事長の田村哲夫は、1957年の講義で丸山が締めくくりに『ベートーヴェンの生涯』の一節「力の限り善を為せ 何ものにもまして自由を愛せよ たとえ玉座の階きざしにあるとも 絶えて真理を忘れるな」を板書し、学生へのメッセージとしたエピソードを記憶している。